
僕らの影

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの影

【Nコード】

N1242B

【作者名】

まつたりorz

【あらすじ】

満月の夜にだけ交わされる僕らの会話。冬に鳴く蝉。見えない影。彼の死ぬ夢。

夢を見たんだ。

そう彼は言った。

「灰色の天井からロープが垂れていて、俺はそれで首を吊るんだ。そうしたら、初めはぶらぶら揺れてた体がさ、ゆっくりゆっくり時計周りで、回りはじめるんだよ。一定の速度で、ずーっと。」

彼は、煙草の煙を吐き出しながら笑う。

僕は、その遺体の下で動き続ける彼の影を想像してみた。

影の主が生命活動を停止しても、なお影は忠実に影なのだろう。彼の身体が灰になり消えさるまでは。

「だいぶ、冷えてきたな。」

藍色の空を見つめながら、そう言う。

十一月半ばに入って、夜は一段と冷えこむようになった。

彼とこうやって、満月の夜に会話するようになったのはいつから

だろうか。

彼はマンシヨンの後ろにある林を見下ろしたままだ。

「蝉の声が聞こえる。」

「もう、冬だよ。それに今は夜だし。」

「お前には、聞こえないのか？」

ベランダから身を乗り出して、深い鬱蒼とした緑を見つめる。

蝉どころか虫の声さえ聞こえそうもない。

「気のせいだよ。だいたい十一月まで、蝉は生きられないよ。」

彼は笑って新しく煙草に火を付ける。

しんとした夜の空気の中、オレンジ色の小さな火が、揺れる。

彼が口を付ければ、強くなり、離せば弱くなる。

「冬にも、蝉は居るさ。鳴き声が聞こえるんだから。冬の蝉は、夜に鳴くんだけ。」

「じゃあ、そうなのかもね。」

やっぱり僕には、その鳴き声は聞こえない。

でも、世の中には、大多数は理解してくれない異常な現実がある事くらい、知っている。

だから、彼の言う事は、真実かもしれない。

僕には、わからない事が沢山ある。

彼のこともそうだし、自分のことすらよくわからない。

だからきつと、周りが自分を理解出来なくなつて、仕方ないことなのだ。

「ねえ、さっきの夢の話だけど」

満月はいつの間にか小さくなり、薄い影を纏っていた。

「僕らは、二人居るのに、影が一つしかないよね。」

彼は僕らの足元を見て笑う。

「夜だから、影見えねえけど。」

「僕らが死んだって、影は一人で回り続けるのかな。」

「さあな、精神なんて元々実体のないものだしな。俺たちが消えたら、また別の人格でも出来るんじゃないかねえの?」

影がいる限りは。

そう言つて彼は、また煙草に火を付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1242b/>

僕らの影

2010年12月9日10時54分発行